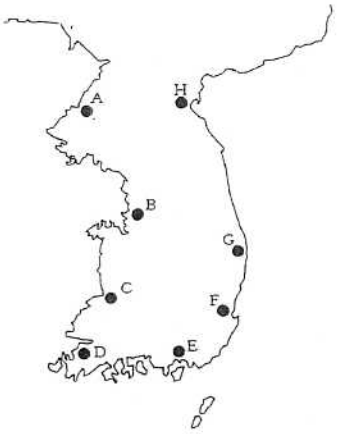
［５］ 次の文を読み，下の(1)～(4)の問いに答えなさい。

韓国は，1960年代半ばから，安くて豊富な労働力を背景に，我が国やアメリカの技術と資本を積極的に導入し，輸出指向型の工業化を進め，鉄鋼・機械・化学・エレクトロニクスなど，多様な分野で産業を発展させた。1970年代には，①ポハン(浦項)に製鉄所，ウルサン(蔚山)に造船・石油化学コンビナートなどが建設された。また，②マサン(馬山)には多くの日本企業が進出し，輸出の振興，技術の向上，雇用の拡大がはかられた。そして，ソウルからインチョン(仁川)にかけての工業地帯は，のちに(ａ)とよばれるほどのめざましい経済成長をとげた。経済発展の牽引力になったのは財閥で，製造業などで圧倒的な支配力を示しており，上場企業の利益の半分以上は，四大財閥に属する40社で占められている。こうして，1976年に1000ドルであった１人あたりのＧＤＰは1995年に１万ドルを超え，1996年には援助供与国の組織である(ｂ)に加盟し，先進国の仲間入りを果たした。1997～98年に，③アジア通貨危機の影響で深刻な経済危機に見舞われたが，政府の構造改革の推進と国際通貨基金の緊急支援でのりきった。



(1) 文中の(ａ)，(ｂ)に当てはまる語句を書け。
(2) 下線部分①について，次のア，イの問いに答えよ。
　ア　ポハンの所在地を右の図から選び，その符号を書け。
　イ　ポハンに製鉄所が建設された背景を説明せよ。
(3) 下線部分②について，次のア，イの問いに答えよ。
　ア　マサンの所在地を右の図から選び，その符号を書け。
　イ　マサンに進出した日本企業が，1990年代以降相次いで撤退した理由を説明せよ。
(4) 下線部分③について，その原因を説明せよ。

［６］ 次の文を読み，下の(1)～(5)の問いに答えなさい。

ロンドンでは，産業革命に伴う工業化によって地方から大量の労働者が流入し，都市化が進展していった。それとともに，スモッグの発生や交通渋滞，テムズ川の水質汚濁など，現在の発展途上国にみられるような都市問題が発生した。こうした状況の中で，市街地の過密や環境の悪化を緩和し，労働者に快適な生活環境と職場を提供するという①田園都市構想が1898年に提唱された。この構想は，1944年の②大ロンドン計画に反映され，諸外国における都市計画に大きな影響を与えた。しかし，インナーシティでは人口や産業の空洞化といった新たな都市問題が発生し，1981年から③ロンドンのイーストエンドの港湾地区などで再開発が行われた。その後も，衰退したロンドン経済の活性化を図るために④ウォーターフロントの開発が進められ，ロンドンの新しい顔になっている。

一方，アジアやアフリカ，南アメリカなどの⑤首位都市では，かつてのロンドンでみられたように，様々な都市問題や大気汚染などの公害問題が発生している。

(1) 下線部分①について，これを提唱した人物名を書け。
(2) 下線部分②について，その計画に示されているニュータウンの特徴を書け。
(3) 下線部分③について，この再開発が行われた地区は何とよばれているか，その名称を書け。
(4) 下線部分④について，その内容を具体的に書け。
(5) 下線部分⑤について，その意味を説明せよ。

［７］ 次の文を読み，下の(1)，(2)の問いに答えなさい。

地理学者ブラーシュ(1845～1918)は，フランスにおける近代地理学の父である。地理学的現象について歴史性を重視する立場を唱え，人間と環境との関係や地誌研究を重視するフランス地理学の礎を築いた。

彼は，ドイツのラッツェル(1844～1904)が唱えた環境決定論に対し，環境可能論の立場を表明して，地誌書の完成に取り組んだ。

(1) ブラーシュが著した「人文地理学原理」の内容を簡潔に説明せよ。
(2) ブラーシュの唱えた環境可能論の主旨を，ラッツェルの唱えた環境決定論と比較して説明せよ。